

令和七年八月度
御報恩御講

や げん た どの ご へん じ
『弥源太殿御返事』

文永十一年二月二十一日

五十三歳

し で やま
南無妙法蓮華經は死出の山にてはつえはしらとな
たま しゃ か ぶつ た ほうぶつ じょうぎょうとう し ぼ さつ て と
り給へ。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取
たま た そうら おんむか
り給ふべし。日蓮さきに立ち候はゞ御迎へにまいり
そうろうこと また い たま
候 事もやあらんずらん。又さきに行かせ給はゞ、日
かなら えん ま ほうおう くわ もう そうろう こ ことすこ
蓮 必 ず閻魔法王にも委しく申すべく候。此の事少
虚 ごと ほけきょう もん ごと
しもそら事あるべからず。日蓮法華經の文の如くな
つうそく あんないしゃ ただいっしん しんじん
ら ば通塞の案内者なり。只一心に信心おはし
りょうぜん ご たま
て靈山を期し給へ。

(御書七二二頁一六行目～七二三頁三行目)

■強調・確認■

大聖人様は、御自身を末法の御本仏としての境涯を顕されるに当たって、種々の大難にあう理由を明かされ、因縁あって弟子檀那となり、武士の命でもある「太刀」を御供養された弥源太殿に対して、

必ず一生成仏の大功德がある
ことを確信して、益々信心に
励まれるように教えられている。

その為に、一には大聖人様の弟子であるという自覚。二には、一生成仏という御本尊の無上の功力を確信すること。を主眼に、祈りに対する心がけを教えられていると拝せられる。

世間の常識からすれば、非常識な人間に見えるかもしれないが、御自身は末法の法華經の行者であるがために、種々の大難に遭っている。その弟子檀那となった「不思議な因縁」を示されている。

本抄の前段に「かかる者の
弟子檀那とならせ給う事不思
議なり。定めて子細候らん」
と言われていることを、我々
も深く拝し、感謝申し上げる
ことが大事。

末法において、御本仏大聖
人様の御教えを修行する者に、
様々な迫害や試練が訪れるこ
とはお経文（法華経勸持品）
に記されている通りである。
道理・文証・現証の上からも
あきらかである。

深い因縁があって弟子檀那
とならせて戴いたことを「無
上の喜び」とし、大確信を
持って諸難に向かい、何事も
対峙して喜んで前進あるのみ
である。

弥源太殿は、武士の命とも
言うべき「太刀」を御供養申
し上げた。大聖人様は、弥源
太殿の真心の御供養に対して、
人の命をあやめる悪の刀が、
御供養したことに対して善の
刀に変わり、後生を助ける
「発心の杖」となると御教示
である。

御題目こそ、我々の死後の
安穩を導いてくれる力強い
杖・柱であると強調され、大
聖人様を頼りにすべしと勧め
て下さっている。なんと有り
難いことでありましょうか。

悪の刀が善の刀に転じることは、悪鬼が道心を起こして妙法受持の人を助ける善鬼となるようなものであり、変毒医薬の原理を教えられている。信心をたもつ一人ひとりの純粹な信仰心が肝要と教えられている。

様々な境涯の人間がいる中で、
たとえ悪人であろうとも、罪
を犯した人であろうとも、ど
の様な人でも救おうとされる
「大慈悲」の教えと知ってい
こう。

宗祖大聖人様は末法の御本
仏であり、究極最高の仏様で
ある故に、大聖人様の御教え
に帰依し御題目を唱えること
が出来れば、即身成仏の境涯
を絶対に得られ、大聖人様御
自ら御案内して下さることを
勉強した。

どのようなことが身の上に生じて
ても、安心して不退転の信心
を進めていこう。

その為に心がけることは、
一に一生成仏の信心。因縁を
深く感じ、報恩感謝を忘れない
こと。二に、一家和楽の信
心。使命を自覚して、常に思
いやりを忘れないこと。

三に、大願成就の信心。所願を立て欲と慢心を捨てること。を夫々の立場から心がけ、実践をしていこう。活動充実を成していこう。